

第二部 聴取調査記録

中支の黄梅、常德、衡陽作戦

兵庫県 嵯峨 晃

私は中支におきまして、大別しますと一、黄梅作戦
二、常德作戦 三、衡陽作戦と三つの戦闘に従軍しまし
た。

私は昭和十六年徴集の現役兵として、昭和十七年二月
一日篠山連隊へ集合して十日後に出発しました。その時、
第六十八師団第五十七旅団第六十一大隊第三中隊より初
年兵受領として軍曹が来てました。

この部隊に入隊するのですが、それがどこにあるのか
不明のまま引率されて列車に乗せられました。窓を締め
切り、面会見送りもなく出発しました。門司に着いて船

に乗せられて、初めて外地部隊へ入隊とわかりました。

輸送船の中もギョウギョウぐめでした。カイコ棚で中
央に空間があるだけで、四方に棚が三、四段作られてお
り、座ると頭が上に当たるぐらいで、船内では横になっ
て休んでいるという状態でした。ちょうど二月の玄界灘
の一番荒れる時です。三角波で船より大きな山のような
波がきます。船は六〇〇〇屯ぐらいですが、木の葉のよ
うに翻弄されて、上に下にまた前後左右と揺れ回るので
全員船酔いです。平然としているのは漁師出身の兵隊で
す。二日二晩ほどゲイゲイで一切食物は口に入りません。
胃袋が逆に出てくるようでした。

私たちは、軍装といっても徒手帯剣で一本のゴボウ剣
だけで銃火器等なものもない。一つの若者集団のようなも
のですが、船が沈んだら困るので、指揮官の命令で船首
船尾と左右舷に歩哨を立てて、海と空を睨んでいました。

その時も船から落ちないようにロープで体を縛っていました。それでもまだゲイゲイやっていました。哀れなものです。ちょっと海が黄色になり波も穏やかです。これでは北支だぞといっていました。

港に入って上陸し兵営があり、その宿舎へ「入れ」と言われ入ったのですが、まるで倉庫のような所です。まあ武装といっても毛布に身の回りの品を包んで背負ってる、まるで買い出しのおばさんのようなものですから、どこでも寝ることはできますが、こんなボロ小屋でどうして寝ようかと思いました。

当時、支那からの帰還兵が多く、そうした者の兵器を現地で受け取って武装するのです。まあ現地受渡方式です。そして翌朝また小さな船に乗れと言われて出発です。「ここはどこですか」と尋ねたら上海だと初めて中国にきてることを知らされました。船は底べたの川船のようでした。それにエンジンがついているだけの粗末なものです。まだ行先不明でドンドン河上へ行くようです。ただ揚子江だというだけです。その時にもう制空権はアメリカにあるとかで、空の警戒と両岸から中国軍がいつ発

砲してくるか分かんず不安な状態で船は進みます。私たちは小銃一丁なく指揮官が拳銃を一つ持っているだけです。心細いことこの上なしですわ。

当時としては、日本軍が力があつたように思いますが。恨みつらみより運命だと半分あきらめの境地でした。徴兵検査をうけて軍隊へ行くことだと自分自身、心にも身体にも思い込んでいました。揚子江を何日上ったか日を忘れるほど上りました。そうして着いた所が南京でした。地図では近いけど行ってみると遠いですよ。

上陸してここが任地かと思っていました。中支総軍司令部があるのです。偉い人が来たので整列して申告したら、また船に乗れといって河上へ向かって上がっていくのです。何日もかかって着いたのが九江という所でちょっとした街です。「上陸せよ」で上がって、また偉い人に申告し、また乗船です。ここで人員割をしてバラバラになって船に乗った。そして武穴という所へ上陸です。ここは田舎の街です。毛布に包んだ荷物を背中にして徒步行進で大分歩いた所に六一大隊の本部があつてようやく到着ということでした。建物は小学校のようです

がお粗末な建て方でした。力をいれると足もとに穴があき、壁をたたけば穴があいて壊れるようなものでした。

臭い匂いで鼻が曲がるほど強烈なものでした。まあここで君たちは六一大隊第三中隊の兵隊だといわれて初めて自分の所屬が分かったのです。

独立大隊で初年兵の集合教育です。独立大隊とは、歩兵で軍旗がないので独立大隊というのです。内地の編成と少し違いますが、第一中隊、第五中隊まであり、歩兵砲中隊と機関銃中隊で編成して七個中隊です。この各中隊の初年兵の集合教育です。夜間は電灯はなく、灯心のカンテラです、水は前部クリークの川水使用です。

井戸は一つありました。全部煮沸消毒でないと口に入れません。食後の食器等は河で洗っても使用前に全部煮沸して使います。洗濯はクリークでやります。身体を洗うのもそうした所です。でも口には絶対入れません。もし上流で毒でもいれられたら全滅ですから。とにかく驚いた。こんなところでどうして生活できるのかと。

腹が減っては戦はできぬで糧秣などは充分ありました。でもよく腹が減ったですよ。

軍医もいたし、酒保のような売店もあった。また、かなり充実しとったと思った。初日一日だけお前ら内地から来たのだとお客様扱いされ、やれやれと思って寝た。翌日の起床のラップで途端に大雷です。初年兵モタモタするな、支那風の厳しさを教えたると。何をするのも早駆けでやれと点呼の時からバンバンとピンタが飛んでくる有様です。整理が遅いと早駆け宮庭五周と朝の一時にして全員度肝を抜かれました。

私の同期の者も苦しい思いをしたし、たくさん戦死しました。この大戦で大正十年生まれが一番多く戦死し、二番目が大正九年で大正十一年が三番目に戦死していますよ。人生で一番大切な時にはお国のためとって働きました。

幹候や下士候の私たちも一番多く死んでます。私も士官学校から現隊へ帰って、見習士官当時に半数以上の同輩が戦死しました。また、常德作戦という大戦で驚くほど死にましたよ。死ぬために軍人になったようなものですよ。

内地では一期二期の検閲で兵隊ができませんが、

戦場現地ですから絶えず半数が警備についています。充
分な教育訓練検閲もなく期間的に終わったようなもので
す。集合教育が終わり各中隊へ帰れといわれ、中隊は警
備地区を担当してますから即日部署に配置されました。

幹部候補生は別に集合教育をやるとその方へ行きました。
そして二期日の試験があつて合格者は大隊本部へ再度集
合教育です。約三〇人が集まりました。これは甲乙種合
同でした。この時、黄梅作戦があり昭和十七年七月八
月ごろでした。この時初めて弾の下を潜つた。

小哨長は将校で分哨長は下士官です。この小哨に中国人
の密偵を使っている。近くの村落に中国軍の幹部がいる
との情報を取ってきた。直ちに逮捕すべく出動した。

ここで我が軍の陣容を申しますと陣地構築は二重陣地
で、内陣は日本軍で鉄条網を張り、その外側に保安隊が
います。その外側にもう一つ鉄条網を張つた陣地です。
そして通信は無線ではなく全部有線電話です。これを上手
に活用して行動してるのです。先に申しました国府軍幹
部を村落全部にわたり探索したがいなない。まあ威嚇射撃
をせよと機関銃を乱射したところが、急にたくさんの蔭

介石軍（これは正規軍だった）が現れて、前面に五〇〇
人くらいいました。こちらは一〇人の日本軍と保安隊三
〇人くらいです。保安隊は逃げ足早く一目散に陣地の方
へ遁走した。擲弾筒を二、三発撃つたら急に静かになつ
た。この間に飯でも食つてと腹ごしらえ中に完全に包囲
されました。人数も少なく、もちろん弾薬もわずかです。
初めての戦争でこれはえらいことになった。敵は逐次包
囲網を縮小して銃を立ち射ちしながら笑顔で近づき
「シーサンライライ」とドンドン近づいてくる。日本軍
の弾薬の少ないのを知つてううだつた。もう駄目だ最
後の突撃だと銃に着剣して命令を待った。わずか五か月
でこの中国大陸に骨を埋めるのかと覚悟した。古い兵隊
は全部作戦で出ている。留守は私たち幹部候補生が主力
です。これが全員応援のために出動してきた。私たち一
度も弾を撃つたことのない兵隊でも、いざ生死の境とい
う時はクソ度胸ができて一目散に突進した。そこを出た
途端に一斉射撃をしてきたが弾は当たらず空を撃つた。
土手にたどりつきホッと見ると、麦畑の麦の穂が弾で飛
ばされて一面に落ちてた。私に当たらぬのが不思議と

思った。今思うとあの時は野戦経験豊富な軍曹がお前たちの命を俺にくれといった。わたしもこれで人生の幕を引くなど感じた。不思議に一人も怪我人もなく無事だった。一人ずつ後方の土手の下に逃げろと命令されて下がった。そしてら中国人は陽気なのか老人が一人土手に腰かけて煙草を吸っているので二度びっくりだった。その老人に小舟をくれといって徴集して川下に下り、途中で下りて小山に登ってみてまたびっくり、物すごい中国軍がいるのです。その時、後方より友軍の砲撃が始まってドードンとやってくれました。中国軍は砲弾が飛んでこなくても、その音に驚いてクモの子を散らすように逃げていく。その速いことといったら今思い出しても大笑いですわ、これでヤレ命が助かったと思ひ、初めて歩兵砲の威力を知りました。山を下りてみたら小哨長がやられ、もう一人古参兵が貫通銃剣を受けていました。それでも逃げてきていました、生命力の強さをまざまざと見たようでした。小哨長は「えらいことをやった、とにかく遺体を収容せよ」と命令し、半年ほどの初年兵がなにも分らず命令のままに働いて、戦友の遺体を後方へ収

容する。戦争の無残さを知らされました。またその遺体は全部軍服も軍靴も剝ぎ取られて裸一つの丸裸です。中国軍が全部剝ぎ取っていった。誠に悲惨な現場でした。

遺体を収容したが、穴を掘って埋葬せよといわれても、道具はなにもなく、手や銃剣で少し掘って、その上に草や麦ワラを置いて埋めたのです。その前に遺骨を取るの腕を切って間違わぬように各人で分担して持ち帰ることにした。小哨まで駆足で引き揚げてやれやれでした。

保安隊の連中は知らぬ顔でわれわれを見ていた。この時私は大隊に引き揚げる予定でしたが過半数の戦死者のため、このまま小哨勤務を命ぜられました。初年兵が古参上等兵のする歩哨係をしました。ちょうどそのころ本部で幹部候補生の試験があったが受験できなかった。兵員は少ないし保安隊はいつ寝返りをうつか分らぬ中国人です、心細いことでした。

よその部隊で保安隊に食物に毒を投げ入れられて全滅したことがあったので、細心に注意せぬといつやられるか分からんです。本隊は作戦出動で残留隊は少なく私たちの初年兵が主力です。まあ幹部候補生三〇人は無傷

ですが、敵も初年兵の集団だと知ってますから少しも気をゆるめることはできなかった。幹候二次試験があつて合格した。その時に黄梅作戦でその方の援軍を出したから、ますます兵力減少しているので、私たちは一線には出なかつたが後方部隊として大活躍しました。兵站の要衝地点等に分散勤務でした。私は六一大隊ですが隣の六二大隊に昔中等学校野球全国大会で甲子園で中京一明石の延長二五回戦があつた時、明石の名投手楠本という人が六二大隊にいて軍曹であつた。家に子供ができたといつて喜んでいたが、この戦いで死にました。

幹候生は前線でも集合教育ということで一堂に集まつて勉強せよと、夜間にやりました。灯火は菜種油の灯心です。九時になると消灯で、士官の部屋へ行って深夜までやりました。昼の疲れで半分居眠りでした。試験は合格して上等兵になり、学校が内地だから、ひとまず、武穴より久留米の陸軍予備士官学校へと帰ってきました。

学校の厳しさは話になりませんよ、朝から夜寝るまでちよつとの間があれば、必ず銃剣術をやることでした。勉強、訓練のほか休むことができなかった。少しの休け

い時間もすぐ銃剣術で、一分の隙もなく鍛えられました。階級は伍長、軍曹となつても演習場への往復は全部駆足で、いついかなる時でも兵の先に立って働くのであると徹底的に鍛えられました。もちろん頭の方は諸典範例をたたき込まれました。同期の中に胸を患つて入院し、後で死んだ者がいました。また各自で反省録に少しでも違反したことがあれば記入し、それを区隊長と中隊長に報告するのです。「自心に違反と感じ悪いと思つたことは細大漏らさず申告す」、これが校則です。また報告、忠告すると必ず鉄拳が顔といわず頭といわずブツ飛んで、目の前が真っ暗になつて倒れることもあつた。

己を正すことが徹底してどんな些細なことでも反省録に記入です、内務も訓練も全部です。夜間寝ている時だけが自由でした。ある時、私が反省申告に行った時、一人の下士官が報告して殴られ、それで脳震とうを起こし倒れ、窓ガラスを割つたがムクムクと立ち上がつて「自分はただいま窓ガラスを割りました」と申告をした。まあそのように厳しいものでした。内務班は全員同期ですから気分的に楽でしたが、順繰りに役職が回ってくるの

で大変でした。週番、班長、衛兵当番等々約六ヵ月間充分鍛えられました。

私は子供のころから剣道をやっていた関係で現在もやっている。銃剣術は得意でした。区隊対抗試合で優勝し、その他も良かったので総監賞の第一候補でした。ところが衛兵勤務で司令の時に前哨が居眠りをして週番司令の見回りに気付かず欠礼した。この件で一日謹慎を言い渡され、もちろんその前哨の男は三日間謹慎だった。このことで総監賞はお流れになりました。まあ当然のことでした。

また同僚の一人が衛兵勤務の動哨中に腹が減って辛抱できず、酒保(売店)で饅頭の餡があつたのを指ですくって口にいれたところを見つかり、即免官降等で軍曹が一等兵になって現隊復帰させられた。また寒中訓練精神修養といって禪一本の裸になって頭から水をかぶって雄叫神社の玉砂利の上に正座させられたこともあった。内地にいても家族への連絡もなく、もちろん面会一切厳禁でした。

卒業して門司より釜山へ渡って貨車に乗せられて山海

関を通過して南京まで、何日かかったか忘れなければ所にも困った。貨車でしよう、またどこで停車するかわからない、荷物貨物と同じですよ。南京につくと総軍司令に申告して、すぐまた船で漢口まで行きました。

でもまだ士官適任証をもらっていないから普通の曹長と同じです。

それから武昌へ行けといわれ、そこで見習士官の現地教育が三ヵ月あるのです。学校の延長で実地実戦教育です。服装は兵服で訓練も兵隊と同じです。互選で中・小隊長を決めて命令指揮をします。宿舎にいる時は三人に一人の当番がつくのです。営外に出ることは一度もなく、ずっと営内居住でした。また毎日が訓練に明け訓練に暮れで、これが終わって士官適任証をもらって現隊復帰しました。

旅団司令部の警戒小隊長として勤務して常德作戦に参加しました。これは物すごい戦いでした。前に申しましたような兵服でない狙撃といっているのが兵隊との違いです。ただ軍刀と双眼鏡をもっているのが兵隊との違いです。また移動中は前に申したごとく背のうでなく携帯天幕で

全部包んで肩から背負って歩いたり走ったりです。これだと一〇〇里でも二〇〇里でも歩けます。見た目より実戦的でした。警戒小隊長ですから、いつも最先頭を行進します。その時後方でドカンと爆発音です。後方中隊長の馬が地雷を踏んだのです。一片の肉となって人馬ともに飛び散った。人が踏んで通ったのでは別条なく、馬が踏んだことで爆発した。運命とはこのようなものです。

警備地区を一步外へ出たら、何があるか不明です。先行兵に地雷探知器で調べさせての進軍は速度が遅くなり、警戒小隊長全員で駆足で調査です。また空も警戒を厳重にし、ゲリラも出るし警戒小隊長は大変な目に会いました。

この作戦で、一個中隊一五人だけ生存という戦死者を出した隊もあります。全員髭はポウポウです。衣服はシラムがわいて泥だらけで、身体には湿疹タムシです。飯を炊くのも死体の浮かんでる川の水で米を洗い、時間がないから五分間でやれで生米を噛みながら行軍しました。制空権が米軍機に握られますから昼間の行動は難しく、夜間行動が多く、河岸の葦の中を行軍しました。

一八年九月ごろ、中支地区では米軍に制空権が奪われ

ていた。

まあ日の丸の飛行機も時々見ましたが爆音といったら米軍と思えといったものです。沅江という所で敵の大部隊と遭遇して大打撃を受けた。作戦用地図(五万分の一)を見ながら旅団司令部より命令を受けても方向がまったく不明で、自分の現在地を確かめることもできず、それはえらいことでした。

その時も大変でした。いくら攻撃しても陥落できず、後方からはまだかまだかというし、秘のくしゃみ(赤筒)を撃ちこんで肉弾突撃をやっても駄目だった。損害は多く兵隊は弱るし困った。その時、米軍機が飛来して物資を投下した。それが両軍の対峙している中に落下傘で落ちてきた。それが中国兵が勇敢にも取りに出て来る。撃てば必ず当たる所でも出てきた。彼の勇気をたたえてこちらは一発も撃たなかった。

戦闘が長引いていたのでデコボコと入り乱れていますが、フツと見ると旅団司令部が最前線に突出しているのです。私はあわてましたよ、警戒小隊長より前に旅団長がいるのです。敵は即襲撃してきました。夜になっても

ドンドンバチバチです。司令部の戦闘要員は我が小隊だけですよ。司令部は經理や輜重のみで現地人の労役がたくさんいるけど、銃火器も少なく大混乱でした。

現地人が泣き叫んで逃げ回る、馬は飛び跳ねる、弾に当たった苦力が断末魔のような金切り声を出すし。敵はそうした音や声をたよりにめくら撃ちしてくる。まあ暗夜の鉄砲は当たらぬというけど、かなり接近しての銃撃ですから身近に弾の走る音がするし大変だった。一時止まったと思ったらまた撃ち出した。なぜかと思ったら旅団長が寒いといって焚火をしたのです。これを目標に集中砲火ですわ。頭の上をチュチュと通る弾は良いが、足下にプチプチとくるとこれは困る。

擲弾筒を連発したらちよつと敵の発砲が怯んだ。彼らは音響に敏感ですよ。

機関銃をいくら撃っても平然としているが、擲弾筒の爆発音でひるむのですよ。そして静かになったところで、「今だ、退却せよ」と司令部要員が後退し、私の小隊もこれに合わせて退却ですわ。司令官から「小隊長は何事か」とずうっと吐られ通しだった。自分の失敗をいわず、

そのうえ火まで焚いて、私が一人吐られてはかをみました。

夜が明けて昼ごろ陣容を立て直しているところへ同期の士官が一人やってきた。と司令官が「その少尉、向こうの山へ登って敵状を偵察してこい」と命ぜられた。私は彼に「今行ったら駄目だ、あの辺は敵が一杯いるぞ。犬死するな」と注意した。彼も要領よく、「ハイ」とだけ答えて他の方へ姿を隠した。

この常德作戦での戦死者は大変多かった。一個中隊一五人だけ生存という現状だった。でも攻略しましたが、それは戦絡二四で二十四時間攻撃で敵に寝ることをさせず、不眠不休で弱って退却したのです。その陣地に行って驚いた、死体の山ですわ、歩いていると足元がプカプカする、見ると死体の上に少し土が掛けてあるだけです。その後方の野戦病院らしい所には、材木を積み重ねたようにした死体があるのです。敵も死にも狂いで防戦したのでしょう。中国軍もここで三〇〇〇人くらい死んだそうです。

一応目的の常德も陥落したことで成功でした。私の隊

は反転して現隊へ帰りました。途中より敵がすぐ後をついてきているのです。追撃阻止のためクリークの橋を爆破していると雨か霰のごとく撃ってくる始末です。私たちは弾薬も食糧もなくなっており、一生懸命逃げて帰るのに精一杯でした。揚子江を渡るときに第三師団がしんがりを務めましたが多大の犠牲者を出したと思う。私もその時に斥候に出で足をくじいて歩行困難で弱りましたよ。

また前の作戦の時にマラリヤで四〇度も発熱して頭の中が真っ白で何があったか全然記憶なしでした。身体に毛布をまいて苦力に装具を持たせ、杖をつけて身体をロープで引っ張ってもらっての行軍です。病氣と怪我が一番こまるよ。また兵隊は小休止とか大休止とかで休けいがあるが、将校はその時必ず次の命令指示のため指揮官集合で呼びだされる。本場にちよっとの休みもなしでした。駐屯地はよいけれど野戦ではよほど頑健でないこととまらないです。その上、叱られるのは一番先だし、何をしても馬鹿ものと怒鳴られて得は一つもなしでした。今次大戦でも訓練の時は傘形散開でやっけていても、い

ざ敵前という指揮官は軍刀を抜いて先頭に立って突撃する。左右に散開しているはずの兵隊は縦一本になって小隊長や分隊長の後に並んでいる。一番先に指揮官が弾に当たるようなものです。

行軍中に足が怪我で丸太棒のようになって歩行困難なとき、良く助けてくれた兵隊がいました。行軍中に旅団長が馬から落ちて輿を作って兵隊にかつがせていくので、私はその馬に乗って助かったこともありました。

中支の冬の寒さは日本内地よりは十分寒かった。ずうっと氷点下でした。九江に帰ってちよっと休みました。ヤレヤレでした。と、またぞろ学校へ勉強に行けですわ。相模原の特殊学校で暗号通信教育です。これには南京総軍より選抜された将校が行くのです。予備役は私のほかにもう一人で、他は全部士官学校出身の本職将校でした。この陣容をみて、これは大変なことだと思った。この時期、日本軍の暗号が敵に解読されて困っていたのです。各方面軍において独自に作り、作戦に使用せよということとです。私は旅団からですが総軍通信派遣という肩書です。大本営にも出頭し見学したし、また水戸の航空通信

も見学した。

その学校は座間の陸士や陸通と並んでいます。まあ一応の基礎があるので案外早く卒業しました。もちろん戦雲急を告げる時です。一日も早く活躍せぬと軍の損失ということです。各々命令で分散しました。私といま一人の予備役士官は未定でした。教官の話だと君等二人は危ないところだぞ、覚悟しておけといった。

まあ一応、原隊復帰の命令で帰ったが、さてこの後どうなるか何もわからず南京総軍へ申告して武昌へ帰隊した。衡陽作戦へ主力が出て留守隊は軍曹が長で守備していた。私は本隊へ追従せよと旅団司令部よりいわれ、六一大隊の補充兵が出発するからそれを引率して行け、六二大隊も補充兵が前線へ行く、両方合せて兵員七〇〇、馬三〇〇頭、その中には病院下番といって退院した兵隊や下士官もいたが、なんだか寄せ集めの集団のような頼りない軍隊だった。将校三人、一人は私の同期の中尉で士官学校出身の立派な男でした。馬がいる関係で獣医中尉もいました。行進は道路が狭いので長い縦隊行進でした。馬の関係ですます長い列になり、先頭より最後尾

までは本当に長い列だった。もし敵に襲撃されたらどうなるかと思うとゾッとしました。

その時の武装は五〇人に銃が三丁ほどでした。前にも申しましたように前線へ行ったら戦死者や帰還者のがあるということですね。なんとしてもこの行進は大作業でした。荷車(輓馬車両)を引いて食糧と弾薬を満載して、山あり谷ありです。大部隊が通っているから雨でも降ったら泥濘で、車を押したり馬を引っぱったり、兵隊がマラリアや Dengue 熱でのびるし、残すこともできず、昼の間は空腹を用心して夜間行軍が多く、今だから話せるが、あの当時としても阿呆らしいようでした。武昌より長沙まで一か月予定で出発したのに、丸三か月でようやく辿り着いたということです。途中で栄養失調で弱るものも多く馬は倒れる。夜行軍で昼間は睡眠不足でいくら若者でも弱りへトへトでした。私も責任があったからやれたのです。無責任であつたら倒れていたでしょう。今思い出しても胸が苦しくなりますよ。

長沙に着いたら衡陽より師団副官が来て「貴様は何をしとるか」と怒鳴っている。全員整列させて申告したら

「こんな兵隊はもういらぬ」というのだ。いくら気力でやっても三か月も泥んこで満足な食事もさせず髭も髪も伸び放題、目玉だけギョロとしていたのだ。こんな兵隊はいらぬというが、いくら士官でも兵隊の労苦が分かってはしなかった。中には年寄りの兵隊もあり、だれが見ても精銳とはいえぬ集団です。

そのあと「貴官に転属命令が出ているぞ、十一軍司令部付だ。このトラックですぐ衡陽へ行け。そこから戦闘機で飛び立て」。私は後事が気になったが、同僚士官に托して車上の人となり、一路衡陽へ直行しました。ところが飛行場に飛行機がなく、同行も随員もなく一人で漢口まで行けといわれ、致し方なく食料をカバンにいっぱいいれて足を頼りに歩きました。武装は一本の軍力と拳銃一丁弾二〇発だけです。

日も夜も歩いた、歩いた、物陰に身をひそめては食事をとり、小部隊移動を見付けては同行し、食糧がなくなつてからはどこでも盗んだり、現地人の家に拳銃でおどして進入して強奪した。軍用トラックが走っていたら無理に止めて途中までも便乗し、患者輸送の衛生隊とも同

行して岳州までようやく着いた。

ここには部隊があるので立ち寄って食事を充分にとつて休憩してと思つた時、大空襲があつて、あわてて防空壕に入った。超低空飛行で機銃を乱射された。その間はじつと休むことができて英気を養うことができた。この時は空襲が苦にならなかつた。

そこから武昌までトロツコがあるので大助かりだった。途中でも米軍機の来襲を何度も受けました。その都度、線路から遠く離れていないと危ないので一目散に走って逃げたよ。また少し進む、止めて走る、を繰り返して原っぱを走り、草むらや木立に隠れ、小さなクリークに飛び込んだり、歩くよりは楽でしたが疲れたよ。なにしろ私を狙っているようでしたよ。

無事武昌に着いて、ここは部隊の駐屯地ですから軍人も服装はキチンとして威厳を示している。私は服はヨレヨレで頭のとっぺんから足の先まで泥まみれ、髭は伸び放題、目玉だけギョロつかせている。階級章も少尉か伍長か分からぬ格好ですわ。兵隊や下士官がみな欠礼して通るのです。ただでさえ、むかむかしているのに失敬な

奴とばかりに怒鳴りつけましたよ。留守部隊へ到着して、私を見て皆が驚いて「その格好は何ですか」と不思議そうにうんです。

長い道程をやっと帰ってきたのだぞ、十一軍へ転属するんだ。それで一生懸命に帰ってきたのだ。とにかく行季を出して衣服を出してくれた。でも身体は垢が積もってる。まず風呂を沸かしてくれたので、それに入ってヤレヤレでした。そして俺は今生きている。

風呂はドラム缶風呂です。何か月ぶりでした。今まで身に着けていた衣服は全部焼き捨ててもらったよ。シラミの巣の中に体が入っていたようなものでしたよ。禪から上衣まで全部取り替えたら気分もシャンとして軍装を整えて、漢口の十一軍本部に出頭です。士官学校同期が二人いて出迎えてくれた。まだ髭を剃っていなかったのが散髪屋へ連れていってくれた。鏡に映る顔が自分らしくなまってホッとした。一夜同僚二人の中尉と寝た。夜半まで戦いについて語った。翌朝参謀部へ申告し、高級参謀から「貴官は第十四方面軍山下泰文大将のところへ転属だ。命令書が出ているぞ。すぐ出発せよ」と。南京総

軍へ直行すべく船に乗って、何日かの船旅です。

総軍で申告して、司令官岡村寧次大将と会食し、軍参謀の添書を持って上海の台城鎮飛行場で搭乗した。広東経由でマニラへの行程でしたが、広東が使用不能で雁の巣へ飛び、福岡から台湾へ渡って比島へ行けとの指示です。それで西部軍司令部へ出頭して申告、参謀が「比島は今大激戦中だ、絶対命はないぞ。一週間の休暇をやる。親に顔を見せてこい」とのこと、憲兵隊で証明をもらって姫路へ帰った。

南京でも福岡でも死ぬといわれているから、二度と帰らぬと別れをして雁の巣へ引き返し、雪の少ない日にやっと飛び立って台北へ着いた。この台北飛行場も私の到着直前に空襲があって火災の最中だった。この大混乱の中を台湾軍司令部へ申告に行き、比島行きの便を頼んだ。参謀が「君は比島へ行けると思っているのか。今、軍には飛行機はない。また、あっても比島にはやらぬ。絶対に無事行くことはできない。もし行っても降りるところがない。山下大将は山の中で戦っている。平野は全部米軍がいるんだ。君は台湾軍に転属だ」。この時、私

の申告を聞いていた佐官と尉官と二人いたが、二人は比島より最後の連絡で台湾へ辿り着いていた将校のようだった。

ということで比島赴任不可能で、台湾第十方面軍独混百三旅団通信隊へ配属を命ぜられた。

それから後、台湾防衛ですが、総軍参謀部に各師団連隊の指揮官が招集されて、兵技演習の机上説明でした。

その時「極秘電報が入った」と私のところへ通信の古参軍曹がいつてきた。解読を命ずると、今度はまっ青な顔をして電文を持ってきた。私も慌ててそれを読み、今一度解読したが間違いなした。極秘電報は暗号専門将校が解読また発信することとなっている。直ちに先任参謀に「極秘電報です」と解読電文を差し出したら、「馬鹿もの」と叱って、電文を読んで顔色を変えた。各師団長や指揮官に「一寸待て」で司令官に電文を渡し、発表した。電文は「大本営発、戦闘停止、爾後の命待て」でした。一度に気が抜けたようで、頭の中がカラッポになってボーとしましたよ。まあ以上が私の軍人時代でした。

常徳殲滅作戦

滋賀県 西村 政治

作戦開始の集結地へ

船団輸送

防衛庁戦史叢書によれば、支那派遣軍(第十一軍)は昭和十八年十一月二日に常徳戦開始となっているが、第百九連隊は作戦開始の日よりも一か月早く十月三日原駐地である湖口を出発した。輸送船に乗船し揚子江を遡行した。一帯どこへ行くのか誰にも知らされていなかった。敵飛行機の目を避けて夜間の行動である。

漢口北岸に上陸し行軍また行軍

大軍団は西へ！西へ！次の日も次の日も行軍は二〇日間以上も続いた。一体どこまで行くのであるうか、準備行軍で当分敵と直接戦闘を交えるようなこともなかったが、治安は悪く住民の大部分は逃亡し、ゲリラがどこから出てくるかわからない。特にこの地域は、共産軍が